

不 作 の 弁

清 水 陽 子



結婚いたしましたして、そろそろ二十年にもなりますが、その間で一番耳についていますのが、「お前みたいな者と結婚して一生の不作や」という夫の言葉でございます。はじめの間は口の中で何かいつているなと思つていたのですが、いつの頃からか、はつきりと解るようになるようになってまいりました。時には「一生の不觉」ともいつているようですが、これは自業自得と申すもので、その時には少しは気の毒な氣もいたします。

しかし、わたくしにとりましても決して豊年万作と思つてゐる訳ではございませんで、これはいかいぬかの違いといつてよろしいかと思つております。実家が浄土真宗で、お寺の近くにあつたものですから、禪宗や真言宗にくらべて浄土宗のお寺には親しみがございました。それでもいざお寺へ入つてみますと、考え方や態度の折り目とでも申しますか、そのようなところに、やはり在家の場合と違つたところがございますまして苦労いたしました。それに漸やく慣れてまいりまして氣がつかますと、夫が肝心なところで（自分の妻にあのやうなことをいうこと自体がその一つでございますが）この

折り目から、しばしば、外れるのです。「不作」の思いはこちらの方にもある訳でございます。

佛教大学へ奉職させていただき、また京都に住い移すことになりました。夫の研究生生活の便宜を計ることに心を注いでまいりました。苦労いたしましたのは、お酒の好きな夫と「飲ませ」・「あきまへん」というアルコールをめぐるの攻防戦でございました。この戦いに不利であつたことが、こゝとさらに「一生の不作」といわせているのだといはしますと、それは夫の心得違いだと確信しているでございます。

最近、お酒をピタリと止めてしまいましたのでアレアレ不思議と喜んでいきますと、自動車の運転を習い出しまして、借金までしてはやばやと自動車を買つてしまいました。ついこの前まで、自動車は諸悪の根源だといつていましたのが、今度は、機械に愛着を覚えるのは人間を愛せなくなつた現代人の悲哀であるとか、自動車は人間を機械化するのではなく自動車のことで人間は新しい時間・空間の中で自由に生きるのだとか訳の解からぬことをいい出す始末です。初老期の氣紛れは危険だと聞いていますので、大変不安でもありますし、アルコールの次ぎはガソリンをめぐるの攻防戦かと思ひますと溜息が生まれて、本当に苦労の種は尽きないものがございます。この分では、一生、「不作」・「不作」といわれつづけなければならぬことになりそうですが、夫が立派な先生方や、お友達の方に恵まれて、細々とではございますが研究を続けているのをみます時、知恩院の忘れ傘のように、わ

たくし一人ぐらいは不作である方が、却つて夫の身のためと思ひなおしてもいる昨今でございます。

(本学清水澄助教授令聞)

自然と生活

(シヤンティニケートン)

田中典彦

インドの朝は早い。午前四時半頃にはもう牛の引く車の音が聞えてくる。昼間の、あのぎらぎらした太陽の暑さを避けて人々が活動を始めるからである。朝のすがすがしさはこの国でも同じである。広々とした平原に点々と散ばっているこんもりと繁つた林がある。それが村人達の生活の場である。生の営みは朝の火起しに始る。真新しい太陽が闇を打ち破つて東の空を白め始めると、朝もやと共に、それぞれの林から幾筋かの生活の煙がたなびく。その筋をかくぐるように家畜の群が移動する。実にのどかな風景ではないか。こちよきに身をまかせてばんやりと小さな丘の上に立っていると、やがて近ずいてきた煙が鼻をくすぐる。日本の煙の臭いとはちがう。炊事につかうグテ(牛糞を乾燥させたもの)のそれである。慣れないものには鼻をつくように感じられるが、毎日その中にいる者には香ばしく、いかにもこの国らしいものを

覚える。

大学の授業も早朝から始まる。大きな森林の中のあるところに白い建物ポツリポツリとあるというのが第一印象である。何階建てかのビルが建ち並んでいる日本の大学のイメージとは全く異なる。自然の中に学ぶこと、それが創始者タゴールの心だという。休み時間などよく校内を歩き回つたものである。マンゴーの巨木のつくる大きな蔭は恰好のクラスルームとなる。小中学生達は各自の座具を持ち、それを敷いて勉強する。いたるところでこの円陣授業が開かれている。こちらでは英語、あちらで数学、その向う側では歌、そしてドラマのけいことといった具合である。授業が終われば学園内はさながら公園である。樹々の中を走り、ころげ回るのである。通用門をくぐつたところにある有名なサーラ樹の並木では可愛らしいリス達が飛びはねていた。

太陽が天空のほぼ三分の一を駆け上ると、こういったのどかな風景はかき消される。今まで生きていたすべてのものがまるで影を潜めてしまうのである。人々は家の窓という窓を閉ざして眠に入る。だらりと葉をしながら樹々の下には子供達に代つて、牛やガダと呼ばれるロバの一種が、さもだるそうに時々体をブルブルゆするようにしてしばしの涼をとっている。昼食のための生活の煙は、今度は人間の溜息のように感じられる。

平原の夕焼け空は見事である。よく友とともに夕日を見にと近くの丘や川辺に行ったものである。ハーモニカと笛を持